

# 全私保連保育・子育て総合研究機構・研究成果報告書 『自由の主体』が育つための保育実践に関する調査研究 を読む手がかり

保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

## 1 はじめに

本研究成果報告書（以下、報告書）を書いた山竹伸二氏（大阪経済法科大学 CAPP 客員研究員／著述家）は、哲学・心理学の分野で批評活動を展開され、その著書『子育ての哲学』（ちくま新書、2014年）では、子育ての本質を探究しています。そこからさらに発展させ、本研究では「保育の実践」から「保育の本質」に迫ることを試みています。報告書は3部構成で、第1部「民主主義社会の人間像」では「自由の主体」の概念が提示されています。第2部では山竹氏が数々の保育園を訪問し、そこから見えてきた「自由の主体」についての考察、さらに第3部では保育実践事例から考える「自由の主体」として示されています。

さて、この手がかりで私は、保育者として母親として日々子どもと関わる実践者として、本研究が私に与えた影響について述べたいと思います。それにより、本報告書を読まれた皆さんが自身の実践に引きつけて報告書の意義を考えていただくことを期待します。

## 2 哲学への誘い

新型コロナウイルス感染症が世界中で蔓延し、誰もが不安を抱えて過ごしていることと思います。保育の現場も揺れました。今も迷いながら保育を営んでいるのではないのでしょうか。私が現在関わっている保育園でもそうでした。緊急事態宣言が出された直後には、混沌とした不安が渦巻いているのが目に見えるようでした。そんな中で若い保育者が「私は子どもの幸せを考えたい」と言いました。彼女は、私の保育の願いは「子どもの幸せ」にあるという本質に立ち戻ったのでしょうか。その言葉が皆に響き、「子どもの幸せとは？」「保育とは？」「自分は何のために保育をしているのか？」と思考する力を与えてくれました。

この時私は、「自由に生きる力を育む」という言葉がにわかに思い出されました。本報告書の山竹氏の言葉です。山竹氏は、「子どもの幸せ」は「子どもの自

由な生き方」の中にあるとし、子育ての本質は「自由に生きる力を育む」ことであると述べています。

コロナ禍ではたくさんの自由が制限されています。それは苦しみを伴うものですが、人の命を守るために一人ひとりが了解して引き受けているのだと思います。でも幼い子どもはどうなのだろう、事情を了解して納得して行動するにはまだまだ早すぎる気がします。そんな子どもから友だちと遊べない、外に出られない、など自由を奪わなければならない状況に、心が引き裂かれるような思いで立ち尽くしていました。そんな時、山竹氏の「自由に生きる力を育む」という言葉は、どんな不自由に思える状況であっても「自由であろう」「自由に生きよう」とすることはできるのだと思えて、一歩踏み出す力を与えてくれたのでした。

これまで生きてきた中でこれほど哲学を身近に感じ、身に沁みて自分の人生に必要だと感じたことはなかったと思います。哲学は暮らしから遠いところにある難解な学問ではなく、日常のごく身近なところに携えられていて、考えるヒント、生きるヒントを囁いてくれるものだったのです。「哲学って難しそう」と身構えず、暮らしの延長として自分の日々を思い浮かべながら報告書を読んでいただきたいと願います。

## 3 「自由の主体」を育む保育実践

山竹氏は、「自らの自由な意志で行動を決定し、その責任を担うことのできる人間」を「自由の主体」と呼び、子育てや保育の中で「自由の主体」を形成することが重要であると述べています。人間は「自由」を求めつつ、同時に他者からの「承認」を求める存在です。他者からの「承認」を得ることによって自分の存在価値を実感し、生きている実感を得ることができるからです。しかし、他者からの「承認」を優先すると「自由」が奪われることもあります。民主主義の社会は自由に生きることを認めています。その枠組みだけでは十分ではなく、この「自由」と「承認」の葛藤を克服し

なければ自由に生きることはできません。その道を開く鍵が「自由の主体」を形成することなのです。

詳細は報告書をお読みいただくことにして、「承認不安」をキーワードに、毎日のお弁当作りにうんざりしていた私のエピソードを紹介させていただきます。

#### 『〈誰のための彩り弁当〉』

長期休み、連日の子ども用のお弁当作りがしんどくて、「明日もお弁当かぁ」とぼやいていたら、「明日は僕が作るのか？」と夫が言った。「ありがたい」とお願いしつつ、内心は（大丈夫か…）と夫の作るお弁当への不安でいっぱい。不安は的中し、できあがった弁当は、1段目には真っ白のご飯のみ、2段目には焼肉のみ、「白」「茶色」の2段弁当だった。味は最高、でも彩りが…。「ミニトマト入れる？」「ブロッコリー入れる？」と助言してみたが、夫は「これで完璧！」と言うので、渋々そのまま子どもに持たせた。出かけ際には「今日のお弁当はお父さんが作ったんだからね！」と息子に念押し。「食べる時にさりげなくお父さんが作った～って言うんだよ！」なんていうアドバイスまで伝えて送り出した。

夕方、帰ってくるなり息子は言った。「今日のお弁当最高だったー！好きなものしか入ってないし、ご飯にかけて食べたら牛丼みたいで最高！毎日これがいいよ！」。その喜ぶ息子を見た瞬間、今まで私は誰のためにお弁当を作っていたんだろうと愕然とした。』

なんてことのない暮らしの中のエピソード。これまでの自分だったら、「せっかくこれまで彩り弁当を頑張って作ったのにショック！」で終わっていたかもしれない。でも「自由の主体」という観点で考えてみると、自分のあり方の問題が明確に見えました。

まず、この時の私の心には、「こんな弁当を持って行ったら母親としてどう思われるかしら」という「承認不安」、「立派な弁当を作って母親として認められたい」という「自己価値への欲望」しかなかったことが明らかです。こんなにも日々子どものことを大切に思っているのに、どうしてこんなことになってしまっていたのだろうと愕然としたのです。

これが自分のお弁当だったら悩みもせず、二色弁当どころか白米だけでも、コンビニ弁当でも構いません。しかし、母親として子どもの幸せを思う時、なぜか不安が出てくるものです。母親としての「承認」を得て、母親としての「自由の主体」を形成することは、なかなか難儀なことなのかもしれません。

「承認不安」を抱くと、「こんなお弁当では子どもが嫌がるのではないか」「子どもがバカにされて困るのではないか」という不安な姿が思い浮かびます。母親としては子どもの幸せを願うので、「それじゃいけない。子どものために彩り弁当を作らなくては」と考えます。彩り弁当の出発点には、自分の「承認不安」と「自己価値への欲望」があったはずなのに、それがいつの間にか「子どものため」にすり替わり、子どものためにと思い込んで子どもが望んでいない彩り弁当を押しつけるという、すれ違いの構造ができあがっていました。このすれ違いの構造では、子どもの「自由の主体」の形成も妨げてしまう可能性があります。

しかしもちろん、子どもの感情や欲望に任せて焼肉弁当ばかり作ればいいとは思えません。栄養のバランスを大事にしたい、彩り豊かなお弁当を楽しむ感性が育ってほしい…、いろいろな願いがあります。ここまできてやっと、自分の「承認不安」を解消するための彩り弁当ではなくて、子どもへの願いを込めた子どものための彩り弁当を見つけることができました。

たかがお弁当されどお弁当のエピソードですが、身近にいる大人のあり方が子どもの「自由の主体」の形成に影響することを痛感し、自身の感情に自覚的になれなくなっている時は要注意と思うようになりました。

保育の現場でも似たようなことがあるのではないのでしょうか。「子どもの幸せ」を願わない保育者はいません。だからこそ「子どものため」と心を込めて考えて日々保育に向かっています。しかし、保育者も生身の人間ですから、置かれた環境によっては、同僚や保護者から自分がどう見られるかという「承認不安」や、認められたいという「自己価値への欲望」を抱えているかもしれません。保育者のありようが子どもの「自由の主体」の形成に影響するとも考えられます。今、子どものためと思っている保育は、本当に子どもへの願いなのでしょうか。「自由の主体」の理論を視点に置くことで、自分の抱えている様々な感情に気づき、考えることができると思います。ぜひ、子どもとのエピソードを思い浮かべながら報告書を読んでいただき、それぞれの「自由の主体」への思考を深めていただきたいと思います。

#### 4 岩屋こども園アカンパニの実践と「自由の主体」

本報告書の第3部では、保育実践を「自由の主体」という視点から読み解いていきます。「自由の主体」

形成のうち特に「感情の主体」については保育者の感情をとおして子どもの「感情の主体」を探っており、前述した保育者のありようと切り離せないのです。

実践には、岩屋こども園アカンパニ（以下、岩屋こども園）の保育実践を取り入れています。岩屋こども園では、鯨岡峻氏のエピソード記述の方法で、保育者がエピソードを記述し、カンファレンスで語ることを続けています。岩屋こども園の室田一樹氏（現・修学院保育園園長）は、子どもと保育者は〈ともに暮らす関係〉であり、その保育者のありようが子どもの心を育てていくこと、この保育者のありようを起点としてエピソードが記述されていくことを述べています（『保育の場に子どもが自分を開くとき』[ミネルヴァ書房、2013年]）。岩屋こども園の保育は、こういった保育者のありようを丸ごと認めよう、認め合おうとする信頼関係の土壌のうえに立って営まれているのです。

山竹氏は岩屋こども園を何度も訪問し、保育を見たりカンファレンスに参加する中で、園の居心地のよい空気感や保育者同士の信頼関係を感じ、その関係性の中で保育者がエピソードを赤裸々に記し、カンファレンスで率直に意見を言い合えることの重要性を指摘しています。鯨岡氏のエピソード記述の方法では、「事象にあくまでも忠実に」記述し、「あるがまま」を主観を切り捨てずに描くこととされています。保育者が「承認不安」を抱いていると、「どう思われるだろう」「ばかにされるのではないかと」、率直な思いを記述することを躊躇してしまうかもしれません。「認められたい」気持ちが強く出してしまうと、SNSで多数の「いいね」を求めて投稿するように読み手を意識した記述になってしまう可能性もあり、いずれも鯨岡氏のエピソード記述の方法は実現しません。

保育者が認め合う信頼関係のもとに生きいきと営まれている保育の日々を率直に描く岩屋こども園のエピソードは、それだけを読んでも感動します。本研究では山竹氏の解説が加わることで、この園の保育実践がさらに深みを増して理解することができ、岩屋こども園と山竹氏の往還をととても心地よく感じます。

もう15年以上前のことになりますが、私が初めて岩屋こども園の保育、保育者が描くエピソードに出会った時、正直「岩屋だからできるんだよ」と思いました。でもそれは大きな間違いでした。今関わっている園は開園して2年目、ほとんどが20代の保育者で、てんやわんやしながら保育しています。その若い保育

者が、日々他愛もないお喋りの中で語る保育の一コマ一コマを残していきたいと、その翌日には「保育のハッピーシェア」と名づけたチャットワークが開設し、日々印象に残ったエピソードをアップしていくようになりました。スマートフォンから打ち込まれる短い文章と写真で、エピソード記述にはまだまだ至りませんが、保育を喜び合う幸せを感じる中で、保育者同士の信頼関係の基盤が確実に築かれています。こうして私たちの保育は私たちの手でつくっていけると、「岩屋だからできる」と思ってしまった過去の自分に言いたい。そして保育者が自由に自分たちの保育をつくっていかうとすることが、子どもの「自由の主体」を育むことにもつながっていくのではないかという可能性と、岩屋こども園の実践と山竹氏の往還により生まれる心地よさが保育を豊かにしていく希望を感じました。

## 5 おわりに

報告書を読んでいると、山竹氏の保育哲学の旅に同行しているような気持ちになり、この先この旅がどのように展開していくのかワクワクしてなりません。皆さんもきっと、本報告書を読み終えた時には、保育哲学の旅の入り口に立っていることと思います。

保育実践が「自由の主体」の形成にどのように関わっているのか、保育実践から保育の本質を取り出していく山竹氏の試みは今始まったばかりです。今後さらに、岩屋こども園の保育実践から研究を続けていくことが計画されています。

保育の場は、複数の保育者、保護者、子どもたちが関わり合う場であり、保育の場が持つ共同性が子どもの「自由の主体」の形成に重要な役割を担っています。これからの社会では、その役割はますます大きくなると考えられます。そのためにも「自由の主体」を形成する保育実践とは何か、その探究の過程で私たち一人ひとりがともに思考を深めていくことが大切であると思います。同時に、山竹氏は、共同性の中で保育者がどのように成長していくかという点に興味を抱いています。そして今後の研究では、保育者のありようや成長に及ぼす影響についても調べていきたいという意欲も示しています。保育の現場に生きる私たちにとって、より身近なテーマであり、多くの方に興味を持っていただけるのではないかと期待しています。皆さんと保育哲学の旅をとともにできることを願っています。

**城 真衣子** 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会臨時委員

